

<企画 2> 東日本大震災ワークショップ・シンポジウム

ワークショップ「被災体験の聞き取りから—地域研究（陸前高田）実習参加学生の報告—」

報告 1 震災当日の行動、津波からどう逃れたか

泉有香、遠藤美里、米田美香、松村千汎

報告 2 震災後の行動

三次好華、高橋梨紗、宿澤麻利子

報告 3 避難所での生活

木村悠、鈴木杏菜、鈴木美穂

報告 4 仮設住宅について

石川しほみ、勝田美咲、菊池彩花、山口真紀子

報告 5 伝えたいこと・教訓

岩永紗弥、濱中麻梨菜、東福こと子

シンポジウム「震災の体験から考え、行動し、発信する」

陸前高田実習の概要とその成果

熊谷 圭知（グローバル文化学環教授）

陸前高田をどう考えるか～震災から未来へ

田村 満（岩手県陸前高田市・高田自動車学校）



2. 地震発生直後の行動

2.1 地震発生時どこにいたか

◇自宅(半数以上)

=海の近く、津波の危険

◇仕事場

=海上、作業場

◇買い物・路上

◇子供の病院



(http://www.esri.co.jp/mex/MapGIS/03/03/030378/01-03/03447000/018/018.html#addressSearch=427621825258282828)

→いずれの場合も1人でいた人は少なく、ほとんどの人が地震発生時だれかといっしょにいた。

2.3 逃げるとき持って行ったもの

現金・衣服・食料<代わりの効かないもの>・命に関わるもの

<地震発生時何を持って行ったか>
2012年度地域研究実習II聞き取り調査より

何も持たなかった、着の身着のまま

持って行ったものがある

- ◇免許証、財布
- ◇ねんねこ、紙おむつ
- ◇上着(コート、はんでん・カッパ)
- ◇非常用持ち出し袋
- …保険や年金の書類
- 薬手帳
- 自治会の通帳
- ◇仏様、遺影、遺灰
- ◇常備薬、薬手帳、保険証

- ◇カッパ
- ◇携帯
- …あとから連れてきた人が持ってきてくれた

非常用持ち出し袋を用意していなかった家におらず取りに帰ることもできなかった

2.4 何で逃げたか

◇車

→仕事場から一旦隣近所に声をかけに戻って、車に乗り合わせて逃げる

→車が渋滞で動かなくなると、車を捨てて徒歩や走って逃げる

◇自転車、走り、消防車

2.2 誰と逃げたか

家族(子供、娘、息子、親、おばあさんetc)
道で会った人、ペットの犬

◇お年寄り・子供をおぶって/手を引いて逃げた

◇知り合いで心配そうなところ(昼間家に1人であるお年寄りなど)には声をかけに行く

2.5 逃げるまでにしたこと

多かった内容

- ・他の人(家族、近所のご老人など)に逃げるように声をかける
- ・家族が家に残っていないか確認する

その他

船を沖につなぐ、水門を閉める(消防団) など

逃げるまでにしたことは、あまり多くなかった(聞き取りをした人の多くがお年寄りだったため?)

3. 見たもの、聞こえた音、感じたこと

◇逃げる時に見たもの

「あんなに大きな津波が来るとは・・・」

「堤防から波と一緒に、いろんなものが溢れるのが見えた。まるで映画のようだった。」

- あのような規模の津波が来ることを予想せず
 - さまざまな場所(避難所、道路etc)から、堤防を越える津波を見る
- 危険を察知、自己判断でさらに高台へと避難

3. 見たもの、聞こえた音、感じたこと

◇聞こえた音

- 大量の船や家などがぶつかり合って、凄まじい音をたてながら迫ってくる
- 消防団の声がけも、破壊音にかき消されて聞こえなかった



きょげん
極限ともいえる集中力

- 音を聞いた感覚がない。
- すべてがスローモーションのように見えた。

3. 見たもの、聞こえた音、感じたこと

◇聞き取りから見たこと

「いつもと違う、そう思って逃げた」

→ 状況判断 + 避難ルートの変更

感覚的なことは、ルール化することは難しい。
しかし、3. 11の震災においては、重要な要素であり、生死の境になったのではないかと。


ワークショップ
被災体験の聴き取りから
— 地域研究(陸前高田)
実習参加学生の報告 —

B 震災後の行動

本当に必要な支援とは


三次 好華 高橋 梨紗
宿澤 麻利子

2013/3/14



目次

1. 被害状況と救助活動
2. 震災後の生活(避難所・仮設住宅以外の場)
3. 被災者の精神面・震災後のトラブル
4. まとめ
・本当に必要な支援とは



2013/3/14



1. 被害状況と救助活動

1) 被害状況

- ぼうはいてい
 - ・防波堤が壊れ、遺体やがれきなどがたくさん流れ着いていた
 - ・街に車も入れない状況
 - ・自分の家や船、車などが離れた場所で見つかった
- ・「びっくりして震えが来るようだった」「涙が出てきた」
- ・「家族と知人が屋根の上に乗って流されて2、3日後に海の上で助けられた、屋根につかまっていた知人を引き上げようとしたがひきあげられず、亡くなった」
- ・家族と会えた時のうれしさ「顔を見たとき涙、涙だった」

2013/3/4

7

2) 救助活動

- ・消防団で生存者の捜索「手でがれきを掻きよけた」
 - 津波警報が解除されていなかったので海沿いには行けなかった
- ・2日目の午後からは自衛隊や他の県の消防隊が来て一緒に行う
- ・遺体の発見と収容、搬送 → 4、5月くらいまで
- ・一週間後くらい～ 遺体の状態の悪化、におい「精神的にきつかった」

3) 家族・親戚の捜索

- ・遺体を探して安置所をあちこち回った

4) 問題点

- ・組織の上まで現場の声が届かない
- ・孤立した地域の把握→地図を見て実際に足を運ばなければならない
- ・指定の避難所であっても津波で流されたところがあった

2013/3/4

8



2013/3/4

9



2013/3/4

2012年9月8日 宿澤撮影

10

2. 震災後の生活(避難所・仮設住宅以外の場)

1) 避難先

- ・無事だった自宅・友人・親戚の家へ→何方か移動している人も多い
- 「だんだんそこにいづらくなった」「いつまでも世話になってられない」
- ・花巻温泉など旅館・ホテルに行く人も

< 物資が届くまでのライフライン >

- ・水 ……山や井戸の水は使えた
- ・電気……発電機を使った、5月後半に復旧
- ・ガス……プロパンガスは使えた
- ・通信……携帯電話は遠野では通じた
電波の入るエリアが限られていた
- ・交通……がれきなどで通れない道路も
車が流されてしまい不便

2013/3/4

11

2) 食料・物資・支援

- ・食料は体育館にもらいに行ったり被災していない農家に分けてもらった
- ・震災の数日後には自衛隊が物資を持ってきてくれた
- ・物資の服は助かったが、サイズが合わず着られないものが多く余り、どうしていいかわからなかった

3) 仕事について

- ・震災前とは仕事への考え方が変わった→「養殖自体あまり先が見えない」
- ・「じっとしているとよけいきつくなる」

4) 問題点

- ・避難所や仮設住宅との違い→物資が少ない、「家があるのだから来るな」
- ・放射性物質についての不安、検査料もかかる

2013/3/4

12

3. 被災者の精神面・震災後のトラブル

1) 被災者の精神面

- ・死を受け入れるまでの葛藤^{かっつう}→「何のために死んだのか」
- ・「家族を亡くし、自分はもう一回死んだから、というような感じ」
- ・震災当日よりも、一週間後など時間が経つにつれてストレス・不満
- ・人間関係や被災状況の差によるトラブル
- ・責任感→「皆が苦しんでいるときに自分だけ楽な道へはいけない」
- ・一年が経って
 - 「ある程度周りも見えるようになってきたが、安定とまではいかない」
- ・子どもの反応 →「一、二週間昼夜間わず泣いていた」

2013/3/4

13

2) 震災後のトラブル

- ・被災した家・車から、ガソリン、家具、現金、かばんなどが盗まれる事件
- ・支援側の課題
 - ・親戚が食料を持ってきてくれるが何日も居てその食料を食べる
 - ・大きな余震^{よしん}でパニックになり混乱してしまう
- ・健康面の問題
 - ・がれきのホコリで肺や気管が悪くなる子どもがいた
 - ・ストレスやショックで原因不明の体調不良になる人もいた
 - ・「薬手帳を持っていたから薬がもらえた」

2013/3/4

14

4. まとめ

本当に必要な支援とは？

- ・訓練・備え
- 普段から家族で話し合っておく、貴重品^{きちょうひん}や持ち出し袋の確認
- ・支援する側の配慮^{はいりよ}
 - 相手が必要としている物資を届ける、善意を押し付けない
 - 現地のガソリンや物資を消費しない、救助車両を優先する
 - 被災地をさらに混乱^{りゆづい}させないように留意する
 - 健康面への配慮^{はいりよ}(特に子ども、高齢者、妊産婦)

2013/3/4

15

- ・防犯・・・混乱の中で思わぬトラブルが起こることもある

→ 普段から周囲の人とのつながりを持つ
声を掛け合い一人で行動しない

- ・精神面のサポートの充実

→ 一人暮らしの人への声掛け、定期的な相談会、相談室^{せっち}の設置など

→ スポーツやコミュニティなど気持ちを晴らせる場・ストレス解消の場をつくる
物資の支援・復興計画^{ふっこうけいかく}と合わせたサポート

震災から学び、今後の防災・支援に
生かしていくことが重要

2013/3/4

16

◎紹介した震災の写真について
(p.10のもの以外)

以下のページで閲覧・ダウンロードできます

東日本大震災 写真保存プロジェクト
Webサービス by Yahoo! JAPAN
<http://archive.shinsai.yahoo.co.jp/>



陸前高田市マスコット
たかたのゆめちゃん

2013/3/4

17

2013.3.14

C.避難所での生活

木村 悠
鈴木杏菜
鈴木実穂

ワークショップ「被災体験の聞き取りから—
地域実習研究(陸前高田)参加学生の報告」

Outline

1. **生活全般**
1日の流れ
主な仕事
食事
インフラ
2. **外部アクター**
自衛隊
外部との関わり
物資
3. **トラブル**
物理的トラブル
精神的トラブル
4. **まとめ**



「陸前高田の奇跡の一本松」
陸前高田市役所HPより引用

そもそも、避難所とは？

- ・ <避難所とは>
- ・ 災害が起こったときに
人々が避難する場所。
- ・ 学校の体育館や公民館
などを使っていた。
- ・ 仮設住宅はそれぞれの
家庭でひとつの家を持
てるが、避難所はすべ
ての人が同じ場所で生
活する。



避難所の様子1

1.生活全般

1日の流れ
主な仕事
食事
インフラ

1日の流れ

- 5:30 まかない担当の人たちの作業開始
- 6:00 トイレ掃除
- 6:30 ご飯の配膳
- 7:00~ 朝食→食器洗い
- 8:00 前夜のミーティング内容の連絡
- 9:00~ 体育館で皆で体操
- 9:30
- 11:00 昼食のおにぎり作り→昼食
- 15:00 午後の掃除
- 夕方 にまたご飯の配膳や食器洗い等をし
就寝

主な仕事

<女性の仕事>

- ・ トイレ掃除
- ・ 食事の用意
- ⇒ 女性の役目として自発的に行動
しかしリーダーシップ取る人不在

<男性の仕事>

- ・ 朝のゴミ燃やし
- ・ 水汲み

食事

<震災直後>
おにぎり・みそ汁・梅干し・つけもの

<物資届く>

、おかずの1品・バナナやりんごなどのフルーツも
⇒管理栄養士が避難所を訪問
十分に食べられる量届いた



食事準備の様子

洗い物

1. ティッシュで拭く
2. やかんで沸かした水を大きなボールにいれて、それで1度洗う
3. 2回すすぐ

インフラ

- ・電気の代わりにろうそく使用
 - ・自衛隊によるお風呂
 - ・自作のドラム缶風呂
- ⇒お風呂に入ることでのリフレッシュ



↑五右衛門風呂(ごえもんぶろ)

2.外部アクトー

自衛隊
外部との関わり
物資

自衛隊

- ・お風呂の設置
(3月から6月まで設置)
- ・バスの送迎のサービス
- ・不足品の調達(1日2便)
- ・ご飯の炊き出し

外部との関わり

- ・市役所からの支援
- ・看護師の巡回
⇒必需品が支給
- ・周囲の農家
⇒米や野菜の提供
- ・親戚の家に避難していた方
⇒薪を持って来て五右衛門風呂に入浴

物資

- ・“物が無いのは皆同じ”ということで避難していない人とも物資を分け合う
- ・“平等”を尊重
- ・異なるものが入ってくるので配るのが難しい
- ・欲しいものは頼めば貰えた

3.トラブル

物理的トラブル
精神的トラブル

物理的トラブル

- ・寒さ(氷点下)
- ・狭さ
- ・情報不足
- ・物資の平等な配分



避難所の様子2

精神的トラブル

- ・プライバシー
- ・気遣い
- ・ひがみ



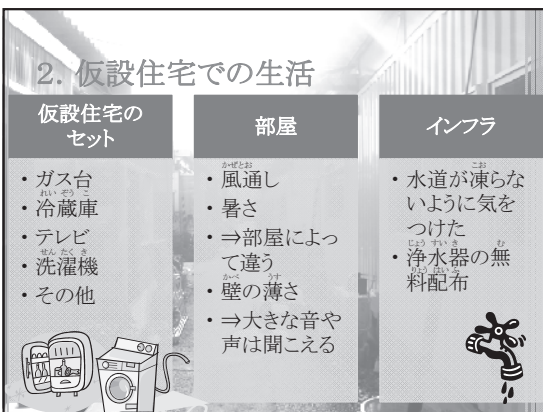
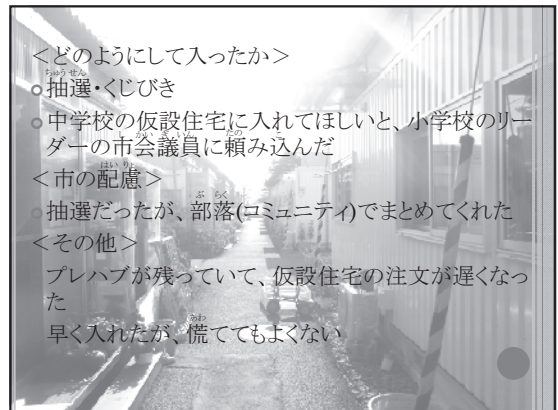
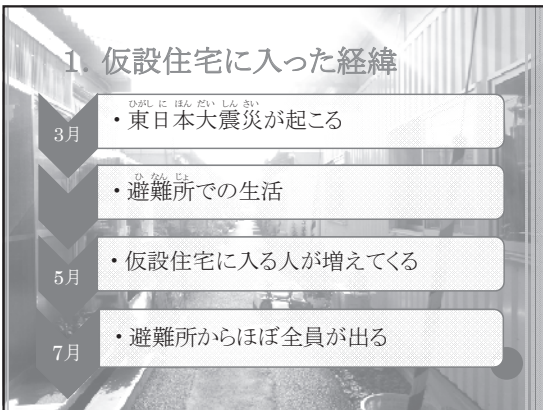
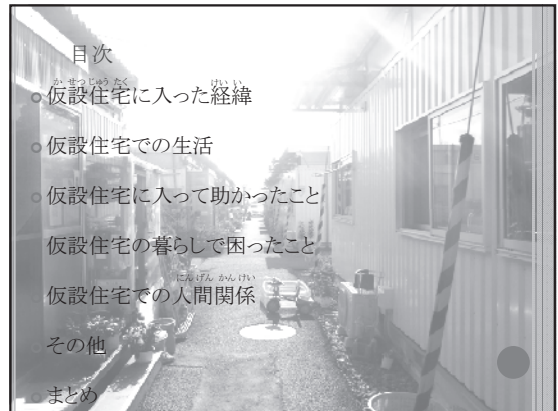
避難所の様子3

4.まとめ

- ・協力
- ・団結
- ・人とのつながり



陸前高田でのお祭りの様子
陸前高田公式facebookより



仮設住宅に入居して1年以上…

- 寒さ対策や暑さ対策などが進み、住みやすくなった
- 自分の世界が広がった

↑ ↓

- 夜になると寂しくなる
- 寝たまま目が覚めなかったらという不安

3. 仮設住宅に入って助かったこと

- プライバシーが守られていること
- イオンや魚屋の移動販売
- トイレや水が自由に使える、テレビも付いていること
- 窓が二重サッシになり、寒さがやわらいだこと

↓

避難所^{ひなんじょ}に比べると、仮設住宅^{かいてつたく}は快適である
また、人に助けられて生活できている

4. 仮設住宅の暮らしで困ったこと

部屋の環境^{へやのかんきょう}

- ・部屋の狭さ・夏の暑さ・冬の寒さ・湿気

例えば…

- ・一つしか部屋がない
- ・夏は一番端の部屋だと鉄骨が熱くなる
- ・冬は霜柱がひどい。布団がくっついてしまう
- ・湿気を含むと、床が膨らんでくる
- ・床の下に水がたまる

移動手段^{いどうしゅだん}

- ・バイクがなかった

外部^{がいぶ}

- ・えさがない

一人暮らし^{ひとり暮らし}

- ・炊事が不自由

困ったことはない

5. 人間関係^{にんげんかんが}

悩み^{なやみ}

- 掃除当番をしっかりとやらない人を注意したいが、できない
- 若い人たちは、知り合いではない人が多い
- 子供が小さくうるさいので、隣が一人暮らしのお年寄りだと申し訳なく思う

無関心^{むかんしん}

- 周りとのコミュニケーションはあまりない
- 挨拶はするが積極的には関わらない
- あまり執着せず、適度な距離を保つ
- お茶のみに集まるメンバーはいつも一緒

良いところ

- 隣、近所は前から知っている人が多い
- 知り合いが多いので語りやすい、声をかけやすい
- 雨が降ったときに、外に干してある布団を家の中にしまっておいてくれる
- お年寄りが子供をかまってくれる
- 隣が誰かわからないアパート暮らしと違って、人間関係があたたかい
- 自治体の人みんな協力的



6.その他

- 生活に慣れてくると、別の欲が次々と出てくる
- 何が足りないかあまり考えない
- 高台への移転は、土地がないと計画が進まない
- 設備に問題があると、市に直してもらう

7.まとめ

- 思ったより
⇒聞き取り
いの人で
しての遠
- 見知らぬ
人間関係
- 物質面の悩
精神面の悩みは時
にくい
- ⇒花や野菜づくりなど、「心の癒し」が必要である

ご清聴ありがとうございました
Thank you for listening



ワークショップ
「被災体験の聞き取りから
地域研究実習（陸前高田）参加学生の報告」

つた きょうくん
～伝えたいこと・教訓～



◆グループE
理学部2年 岩永 紗弥
グロ文2年 濱中 麻梨葉
グロ文3年 東福 こと子

もくじ
◎目次

1. 震災で失ったもの
2. 教訓（地震が起こる前に）
3. 教訓（地震が起きたら）
4. 教訓（震災後に、今となって思うこと）
5. 復興への道のり
6. 市民の意見
7. 復興はどのように進められるべきか
8. まとめ

～震災で失ったもの～

1. 震災で失ったもの

- 震災で無くしたもので、一番思いが残るもの
一船、育児日記帳、結婚指輪など
→やはり、人の存在が一番
- 無くして一番大変だと思ったもの
一あげればきりが無い
必要なものがあつたことが幸い

～伝えたいこと～

2. 地震がおこる前に

- 防災グッズと一緒に身分を証明できるもの、日頃使っている薬、保険や年金などの書類を用意しておく
- 地震がおきた時に家族で落ち合う場所を決めておく
「津波でんでんこ」
- 地震保険に入っておく

3.地震がおきたら

●とにかく逃げる

●高台へ逃げる

●テレビをつける、玄関を開ける



4.今となって思うこと

●感情的に考えてはいけない

●死んだ人たちの分まで背負って歩いていかなきゃいけ

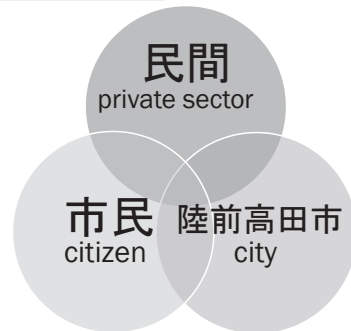
ない

●自分が生きていて幸せだと感じる

●臆慮な姿勢で生きていかなきゃいけない

～復興に関すること～

5.復興への道のり



6.市民の意見

●次世代を考慮に入れた復興計画が必要

●住民同士の意見の違いをどのように調整していくか

●市が立案した計画→従来と同じやり方では？

7.復興はどのように進められるべきか

●全ての人の意見を取り入れることは難しい

→妥協案を取り入れつつ、住民が納得のいくような方向で進めることが必要

●安心して生活できるまちへ

→震災経験を活かし、次世代へとつなげていく

8.まとめ

● ^{わたし} ^{じしん} ^も ^{かのうせい} ^{みいだ}
● 私たち自身の持つ可能性を見出す
→ ^{しんさい} ^{じっかん} ^{ひと} ^{ひと} ^{たいせつ}
→ 震災により実感した“人と人のつながり”を大切に

● ^{こんご} ^{かだい}
● 今後の課題としては...
→ ^{せいび} ^{ふっこう} ^{かた} ^{ひつよう}
→ インフラの整備にとどまらない復興のあり方が必要
→ ^{けいせい} ^{じゅうよう}
→ コミュニティの形成も重要

震災後も陸前高田に残る美しい風景



THANK YOU FOR LISTENING

陸前高田実習
(地域研究実習Ⅲ:2011年度、地域研究実習Ⅱ:
2012年度)の概要とその成果




2013. 3.14.
東日本大震災フォーラム
熊谷圭知(お茶の水女子大学)

実習の背景

- * 東日本大震災⇒日本の多くの人々にとって、尋常ではない苦しみ、衝撃と悲しみをもたらす
- * 何かをしたいという思いに駆られる
- * 東日本大震災に関心を持ち、ボランティアなどで被災地とかかわろうとする学生:多い
- * しかし、かかわろうと思いつつ、実現する機会を得られない学生⇒さらに多い
- * 現地実習授業という形を通じて、被災地に赴き、その現実から学んで、かかわりの機会を学生に与えること⇒大学の役割でもある

実習の目的


- * ①東日本大震災の被災地(岩手県陸前高田市)を訪ねて、被災の現状と復興の過程を自分たちの目で確かめる
- * ②(可能ならば)そのささやかなお手伝いをする。
- * ③(具体的には)陸前高田市Y小学校の仮設住宅集会所におけるコミュニティ・カフェの運営に参加しながら、許される範囲で住民からの被災体験の聴き取りなども行う。

なぜ陸前高田を選んだか?

- * 2011年4月下旬に気仙沼、陸前高田、大船渡を最初に訪問 ⇒周辺地域に比べても被害が甚大(中心市街地が壊滅、死者・行方不明者合わせて1割近くにのぼる)
- * 教員の一人が地縁を持つ(父の生まれ故郷)地域 ⇒最初の訪問の基盤づくり(宿泊先、訪問先、交通手段の確保...)に必要不可欠
- * さまざまな幸運な出会い(Y小学校仮設住宅、自治会長のS氏、集会所の建設...)

陸前高田市の被害状況

- * 低平な市街地中心部のほとんどが壊滅
- * 震災時の総人口:24,246人
- * 死亡者数:1691人(行方不明者・その後の病死等を含めると2千人近く)
- * 全壊3,159戸(半壊を含め3,368戸が被災)
- * 農業、水産業にも甚大な被害
- * 農地の被害額:77億円
- * 水産施設62億円、漁船64億円、養殖施設20億円
- * 小学校1、中学校3が全壊(在学中の児童の被害無)



公共施設の被害状況

市街地中心部の14の公共施設は市役所・市民体育館(写真)はじめ全壊。現在取り壊しが進む(今年度内にすべて解体予定)



実習の内容

- * 往復、夜行バスを利用(4泊3日)
- * 木曜日夜:東京を出発。金曜の早朝:陸前高田着。月曜朝:東京に戻る
- * 金曜日:市街地見学、市役所からの聞き取りなど
- * 土曜日～日曜日:Y小学校仮設住宅集会所で、「お茶っこ」カフェ開催。住民との交流。イベントなど
- * 学生参加者:5名(毎回変わる)
- * 教員:1-2名、TA:1名(同一人が継続)
- * 宿泊施設:地元の方から借りた家、高田ドライビングスクール宿舍、玉の湯(山の上にある地元の湯治場)
- * 市内の移動:地元の方運転のワゴン車(運転手以外7名乗車可)

実習の課題

- * 宿泊施設、交通の便、安全の確保
- * 被災者からお話を聞くこと:許されることなのか?
- * 苛酷な体験をした方々に対する外部者のふるまい方?
- * 「大変ですね」「頑張ってください」といった紋切り型(その場限り)ではない関係性を、どう作るか?
- * 「関わらず語り」を聞くことに徹する(こちらから問い質さない)
- * 繰り返し通う学生たち⇒「また来てくれた」という印象をもってもらえる⇒一過性ではない持続的な関係性の構築
- * 自治会長からの被災体験聞き取りの要請⇒2012年度は聞き取りを中心とした実習に深化⇒たくさんの重い話を受け取る⇒それをどうまとめるか? どうお返しするかという課題

聴き取りの対象

- * ① 米崎小学校仮設住宅
- * 住民からの被災体験の聞き取り(仮設住宅自治会からの要請によるもの)
- * ② そのほかの地元住民(カキ養殖業者、縁者) 被災体験
- * ② 市役所、小学校、地元企業経営者
- * 復興状況とその課題
- * ③ NGO・NPO関係者・ボランティア
- * 現地での活動状況とその課題

被災体験の聞き取り

- * 地域研究実習Ⅱ(グローバル文化学環専門科目)参加学生・教員が実施
- * 2012年5月、7月、9月、11月 いずれも3日間の現地滞在中延べ41名(仮設住宅住民、漁協カキ養殖組合関係者)から聞き取り
- * 形式
- * インフォーマル・インタビュー(大まかな聞き取り項目を事前に考察するが、自由な話の流れに任せる) 一人(一組)1時間～3時間程度
- * 聞き取り場所と形態
- * 1) 集会所でのグループによる聞き取り
- * 2) 仮設住宅での個人・複数の家族による聞き取り
- * 3) 漁協事務所での机を分けての個人からの聞き取り
- * 資料
- * 1) フィールドメモを起こしたもの
- * 2) テープ音声記録を起こしたもの
- * 現在聞き取りデータの分析中

これまでに見えてきたこと ① 震災後の行動について

- * 地震から津波まで:あらかじめ家族で避難・行動の段取りを決めていた例は少数
- * 海の近く(海が見える場所)の人の方が逃げている=地震後、津波の到来を想定した行動をとる
- * チリ地震津波などの過去の体験⇒逆に「ここまでは来ない」という過信になった例も
- * 誰といたか、誰といようとしたり、によって行動(その結果の生死)が大きく左右される

② 「場所」と関係性の喪失 インターローカルな関係性の構築

- * 陸前高田:もともと高齢化と人口流出:顕著⇒震災により加速化
- * 雇用の消失、市街地の復興の遅れ⇒外に出て行った人々:戻らない状況
- * 「陸前高田はエンゲル係数の低い町だった」(米崎小学校仮設住宅自治会長S氏) ⇒その意味する所:農作物や海産物などの食べ物をやり取りする交換経済が存在し、それが社会関係を支えてきた。⇒震災でその物的基盤が崩壊⇒ローカルな社会関係の再生産:困難が増す
- * 外部からのボランティア、NGO・NPOの活動⇒陸前高田に外部との新しい繋がり回路をもたらす⇒「お茶っこ」カフェ(地域研究実習Ⅲ・Ⅱ)を通じたお茶大学生・教員の繰り返しの訪問⇒インターローカルな関係性構築の一助となる

陸前高田をどう考えるか
～震災から未来へ

株式会社 高田自動車学校
代表取締役 田村 満

忌まわしい3月11日が来て

人生が変わってしまった日



☆ ある日突然売上がゼロに…
そして、マイナスからのスタートへ

☆ 雇用を守るとは…
気づかされることが沢山

たまたま高台にあった弊社は
当社の施設を全面開放
* 避難場所・物資輸送所・
警察官基地・自衛隊車両滞在地
燃料給油所・社会福祉協議会・
労働金庫・ボランティアセンター・
報道関係者の宿泊等・
各種会場場所等々

- * 200箇所以上ある避難所の調査から約40カ所をピックアップ
- * 救援物資の仕分け・配送
(3月18日より活動開始)
- * けせん朝市の開設
(国連WFPテント)

これからの陸前高田市は

☆市当局の考え方は……
5年間で
12.5Mの防潮堤
被災した市街地5Mのかさ上げ
☆8年～10年で町を創る……

仮設住宅生活者の最大の関心ごとは？

俺らは、いつ頃、この仮設住宅を出れて、いつ頃、自分の家を持てるのか。

そのためには
被災した自分の土地を、誰が、どれ位で買ってくれるのか。

我々の心配事

10年をかけて町を創ったとして……
その10年の間、ジーンツと我慢して町が出来上がるまで待ってくれる人は何人いるだろうか？

2011年3月11日以前の陸前高田市

☆市制施行時の人口
35,000人
☆災害直前の人口
24,000人

ヶセンの人口予測

国立社会保障人口問題研究所(東海新報2008年9月9日)

| | 合 計 | 大船渡市 | 陸前高田 市 | 住田町 | 2010年3月末 実数 |
|-------|---------------|--------|-----------|-------|----------------|
| 2005年 | 75,781 | 43,954 | 25,005 | 6,822 | |
| 2010年 | 72,786 | 42,416 | 24,041 | 6,329 | 71,987 |
| 2015年 | 69,160 | 40,544 | 22,753 | 5,863 | |
| 2020年 | 65,079 | 38,384 | 21,299 | 5,396 | |
| 2025年 | 60,647 | 35,980 | 19,735 | 4,932 | |
| 2030年 | 56,112 | 33,466 | 18,149 | 4,497 | |

「なつかしい未来創造(株)」って？

千年先の子供達のために私達が出来ることは？

～新たな産業を生み出し、雇用を
迅速に創り出していくための
コミュニティー・カンパニー～

事 業 内 容

1. 自然資本タウン事業
2. なつかしい未来商店街事業
3. 伝統技術革新事業
4. グリーン・サービス事業
5. 防災メモリアル公園事業
6. ソーシャル・サービス事業
7. ICT事業
8. けせん社会起業家育成事業

日本はインタンジブルスの宝庫

日本人には美を求める心や平和を尊ぶ心がたくさんある。

また、「道徳心」「好奇心」「忠誠心」「愛国心」などが、どの国にも見られないほど豊かにある。

これら無形のものが、場面々々で「一所懸命」とか「工夫する」とか「約束を守る」「仕上げに凝る」「仲間を助ける」とかの形になって現れる。